ユング心理学における心理的変容

―岩館真理子「夜汽車に乗って」を読む―

白田信重

2012.12.20　ユング心理学研究会

Wikipedia「岩館真理子」より

岩館 真理子（いわだて まりこ、1957年2月8日 – ）は、日本の漫画家。北海道出身。

1973年（昭和48年）、『週刊マーガレット』（集英社）秋の増刊号に掲載された「落第します」でデビュー。初期はコメディを書くように言われていたらしい。以後、同誌を中心に執筆し、現在は主に「ヤングユー」などの女性誌で執筆している。80年代はシリアスものに路線を変更している。 繊細な感性から生み出される独特の作品世界は、淡麗な絵柄とも相まって、幅広い層のファンを持つ。 1992年、『うちのママが言うことには』で、第16回講談社漫画賞を受賞。このほかの代表作に『1月にはChristmas』、『アリスにお願い』などがある。

長い漫画家生活の中で、漫画の描き方が分からなくなるようなスランプにも、度々見舞われたことがあるという。

岡崎京子・よしもとばななどの作家も、彼女に大きな影響を受けている。

岩館真理子作品の特徴

● 「少女漫画」の中核的存在

未成熟な存在としての少女を描くジャンル
としての「少女漫画」
↓
少女性と現実との折り合いを常に描くが故に
「少女漫画」の中核的存在たり得る
（アニマとペルソナの葛藤？）

● ファンタジーを描かない

「少女性と現実との折り合い」がテーマなら
このことはむしろ必然的と言える

● 「森子物語」の電車モチーフの変化

この現実の「外」へと向かっていく電車
　どっちに向かっているのか、よくわからない
　　↓
この現実の中で、円い線路を走る電車
　好きな人と一緒、風景が変わっていく
　「そういうの、けっこう楽しかったりして」

同じモチーフのイメージだが、イメージ内容が変化
　「現実の外へ」から「この現実の中での循環と変化」
　イメージの変化が当人の成長に対応している

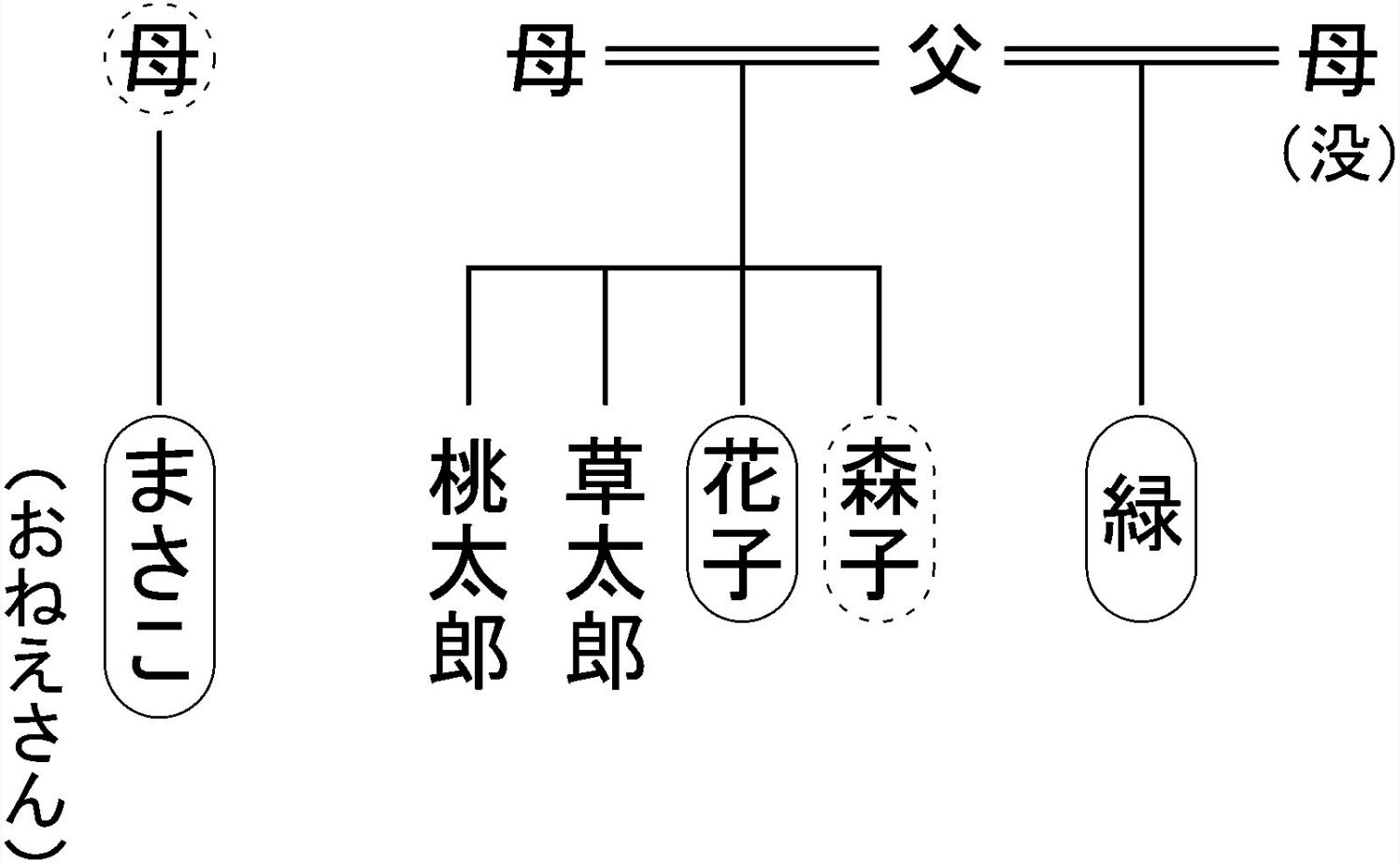
● ユングの心的エネルギー論

イメージの変化が、
　心的エネルギーの流れの転換、
　当人の心理的変容と、セットになる

心的現実の立場からすれば
　外的な出来事や事象
　内的なイメージ
　どちらも同じくイメージとして変化を引き起こす

心理的変化や心理的成長を捉えることが重要
　単体の「解釈」に意味はない

「夜汽車にのって」(1983)登場人物



● それぞれの変化と成長

花子
「孤独」を知る、おねえさんが「好き」
男の子のイメージの変化

おねえさん
イメージの意味との直面、現実の捉え直し

緑
花子に対する関係（姉として）

● ラストシーンの布置

夜汽車「さみしいけれど、美しい」

- ユング心理学の観点から

アニムス像としての「男の子」の喪失
無意識領域の象徴としての「森」

「うそ」のモチーフ

おねえさんとその母との「家族的布置」
　同型のモチーフのコンプレックス
　母は行動化、娘は内面化の違い

イメージに対する姿勢
　おねえさんは受動的、花子は能動的

● 疑問

なぜおねえさんは
「一緒に森に入る」という約束をしたのか？

花子は、この一件を大人になってから
どう思い返すだろうか？